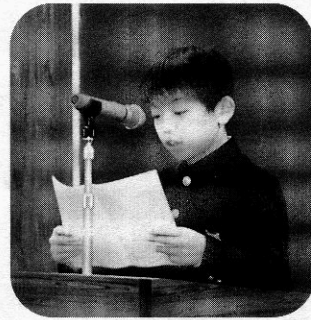




「二人一人の 勲章」

神田小学校6年

増野 浩二



ぼくには生れつきアザがある。学校では、みんなといつも会っているから、だれも何も言わない。だけど、初めて会う人にはいつも特別な目で見られているような気がしていた。そのアザを下関の病院まで手術しに行った。レーザーという皮をこがす物を使用した。パチン、パチンと火花がちって

「早く終われえ。」

という思いでいっぱいになった。

やつと手術が終わり、ぼくがベッドで横になっていると、かんごふさんが

「見てみいさん。」

とかがみをさし出した。アザのあつた所は、こげたように赤黒くなっている。

「学校で何か言われるだろうなあ。」

不安で不安でしようがなかった。

そんな赤黒かったアザも今では、のいてだいぶしぜんな色にもどった。学校でも何も言われない。

でも、こんなぼく以外にも、もつとひどいアザを持った人や、目や手足が不自由などの障害を持った人はたくさんいる。そのような人達は、たまに特別な目で見られたり、差別されたりする事があるように思う。

今回、アザの手術をしてみて特別な目で見られる事が、どんなにつらく不安で、悲しいことかという事がよく分かった。

どうして、障害を持った人達は特別な目で見られるのだ

ろう。ぼくは、不思議でたまらない。きつと、自分達の体とちがうからということ、だけで特別な目で見られてしまうんだと思う。だけど、そんなところだけじゃなくて、障害を持った人達がどれだけがんばっているのかを、ちゃんと見てあげないといけないと思う。

ぼくの手術をしてくれた病院の先生だつて、足が曲がらないという障害を持っている。だけどりっぱな病院の先生になって、病気で苦しんでいる人達のためにがんばっている。先生は、

「よくがんばつたねえ。すぐく痛かつたやろう。治るといいね。」

とぼくをずっとはげましてくれた。そんな障害を持つていてもがんばっている先生を見てみると、自分もがんばろうという気持ちになった。この時ぼくは、人間は見た目じゃなく、どれだけがんばっているかが大切なんだと思った。

この手術は、ぼくにとつてもとてもいい経験になった。



なぜ障害やアザをもつていたら特別に見られるのか、この事についてしんけんに考える事ができた。障害、アザなどをみんな一人一人が特別に見たりせず、それも一人一人の勲章なんだと思うようにすれば差別はなくなると思う。そして、障害をもつていても、自分がんばろうと思えば、きつと周りの人もみとめてくれるだろう。

これからは、人を見た目で判断せず、みんな一人一人が平等だという事を忘れず、自分も気をつけていきたい。